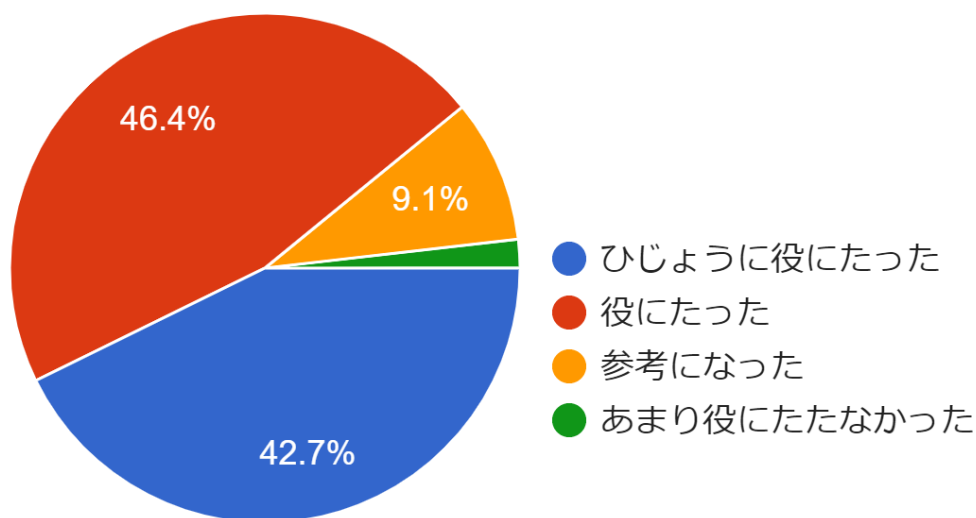




令和4年度夏季研修 | (教育相談・特別支援) 還元度アンケートのまとめ

研修の満足度



講師の井上先生の講演で印象に残ったこと、大切にしたいと思ったこと

(1) キーパーソンについて

- キーパーソンを決めて対応することやキーとなる教諭を作ることの大切さ
- まずはキーパーソンを決めて、徐々に子どもと関わる人数を増やしていくことが大切であること。
- 専門機関との連携や研修参加によって知見を広げる
- PTSDの生徒に対しては、キーパーソンとなる人が支援をするすることが大切だということが印象に残った。さまざまな問題を抱えている生徒がいるので、一人一人に寄り添いながら関わっていききたい。
- 感情への支援のところで、感情の軸になるキーパーソンが、必要だという話が印象的だった。
- 愛着の形成に課題のある子に対しては、特定の一人が関わるようにする。昨年度までの実践でまさにそのことにびたりとあてはまる事例があり、今後も大切にしていきたいと感じた。
- 「生物」「心理」「社会」の多角的な視点から、困り感の背景をみて、支援をしていく必要があることを学びました。また、1人の先生がキーパーソンとなり、重点的に関わっていくことを今後の支援で大切にしていきたいと思った。
- 関わる職員を1名決めると生徒にとってよいということが印象に残った。感情を受け止めることを念頭におき、今後の接し方に活かして行きたい。教師にも役割があり、全ての教師がたくさん声をかければいい訳では無いことが分かりました。

(2) 感情支援の仕方について

- 感情支援が大切だということはどの生徒にも必要で、感情を認めた上でできそうなことを伝えていくことが大切だと思った。
- ASD群の子どもに対して、その子の考え方が間違っているとしても否定せずに、まず認めてから、別

の考えを提案することで認知を修正することが、参考になった。また、複雑性PTSDへの対応で感情支援が大変参考になりました。

- 感情を認め、その上でできることを提案することが、児童にとっても受け入れやすくなるということがよくわかったので、意識してみたいと思いました。
- 感情を認めるのところで、具体的に、何をどのようにすることがその子への支援になるのかヒントをいただけたと感じた。
- 感情のコントロールができず、爆発してしまう子に対して、感情の支援を大切にしようと思った。
- その子の考え方を否定せずに別の考え方もあることを示すこと、その子の人格を尊重すること（人格を否定しないこと）、代替行動を提案していくこと、発達性協調運動障害の理解と課題志向型アプローチが有効なこと、心理・環境の問題(要因)を考えることの大切さ、否定的認知と複雑性PTSD（過去の体験が今の体験に上乘せされる）という捉え方をすること、感情支援を大切にしていくこと、具体例を示しながら話して下さりとても参考になった。
- 感情承認の重要性を実体験からも強く感じられたので今後も大切にしたい。
- 否定ではなく、提案すること。感情支援をすること。キーパーソンがまず支援を行うこと。この3つが印象に残った。
- 子供からの信用、安心を獲得することが大切にし、感情を認める声かけが安心感・活力になり、それぞれの特性に応じた支援をしていくことが大切であると改めて感じた。
- 感情への支援は児童の困り感に寄り添うこと、周りの大人で育てるということ、子供一人一人の実態に目を向け、その子と向き合うことの大切さを改めて学んだ。
- 感情が制御できていないと学ぶことは難しいからこそ、感情の支援を並行してしていく必要がある。
- 子どもに寄り添って、共感的理解をしたうえで支援をしたり、子どもとの約束をきちんと守り、負荷をかけすぎないことが大切。その子の考え方を否定せずに、別の考え方を示すことをしていきたい。
- 自分のこれまでの体験やトラウマから記憶が消えてしまうこともあると知りました。感情への支援に力を入れていくこと、エネルギーをためる器をつくることの大切さを感じた。
- 「困り感」の背景は様々であり、発達障害や環境によるものがあるとわかった。その子の困り感をよく分析し、それに合った支援をすること、決してその人格を否定するような注意をしないようにしたいと思った。
- 否定的認知を繰り返すと「どうせ…」と考える子が出てきてしまうので、感情承認をして、感情を理解した上でできそうなことを伝えていくことを大切にしていきたい。
- 感情承認とともに、適切な『できそうなこと』を提案できるよう、寄り添った指導を大切にし、自己肯定感を高めていくことにつなげていきたい。
- 職員がよかれと思って行っていた支援が、その児童にとっては発達の妨害になり得る。特に、本校は少人数で、全職員が児童一人一人と深く関わる。これは、メリットでもあるが、ついつい深入りしすぎてしまうというデメリットもあるので、支援をしていくうえで、キーパーソンを決めるなどして、その児童にあった距離感を大切にしていきたいと思った。

(3) 発達障害について

- 発達障害や、特性で決めつけずにその子個人を見ることが大切であり、感情理解を大切にし、ただ発達障害と言うだけではなく、その中身を吟味したい。
- 発達障害の中に、発達性協調運動障害があるということが印象に残り、被虐待児や協調運動障害が含まれるという考え方があることを知った。
- 複雑性PTSD傾向児童への対応について、感情を認め、言語化したり、行動へと繋げていく支援や感情理解を示した上で指導に当たる姿勢をして行きたい。
- 幼少期に虐待を受けた児童も発達障害に似た症状を示すことがあることに驚いた。また、その子に応じた支援を行っていくことが大切だと分かった。
- 発達障害の児童の対応の仕方がわかるとともに、発達障がいについてもっと学ばねばならないと思った。
- 第4の発達障がい(被虐待児)や発達性協調運動障がいも意識して子どもたちの様子をとらえていかなければならないと感じた。
- その子のよさを生かした明るいポジティブ気持ちで取り組めることを自分も実践してみようと一人の子を思い浮かべながら策を考えることができた。
- 発達障害の児童生徒に対する支援がとても整理されていて分かりやすかった。



(4) 困り感・感情失禁について

- 感情失禁という言葉は初めてでした。感情支援のための手立てとして、例示された「赤ちゃんへの声かけ」が大変納得できました。人の困り感を承認できないでいるのは、心理的虐待同然だという表現にはドキッと、しっかり寄り添いつつ、支援に臨みたいと思った。
- 個々の困り感の背景を理解したうえで適切な支援を行うこと、困り感を理解し、感情支援ができるよう、時間をかけて信頼を築いていくことが大切だと思った。
- 子どもたちは、困っていることが明確になっているわけではなく、周囲の大人の困り感や反応から表現できないような劣等感や苦しさを感じていることがわかった。時間がかかっても、子どもの感情に寄り添いながら少しでも子どもができそうなことに取り組んでいきたいと思った。
- 児童の困り感と、大人の困り感を混同せず、子どもの困り感を敏感に感じ取って、それを認めながら解決していく姿勢を大切にしたいと思った。
- 困り感の要因は複雑でデリケートだと再認識した。また、支援しているつもりが却って阻害してしまうことがあることを心に留め、感情承認、支援をしていきたいと思った。
- 支援するにあたって、その子の困り感の背景を捉えるということが印象に残った。感情を認める声かけをすることを大切にしたいと思った。
- 児童生徒の困り感には周囲の大人の困り感になるということ。複雑性 PTSD と発達特性による子どもの問題行動や周りの理解不足が関係していることを初めて知った。
- 大人から見て、問題や課題を感じる子どもの姿の裏にある、困り感を掴んで、適切な支援に当たりたいと思った。特に、感情の支援という言葉が自分にとって重く感じられ、赤ちゃんだったときのことを思い出しながら、嫌な気持ちこそ寄り添っていき、その子と分かち合うことで、嫌な気持ちを軽くできるといいなと思った。
- 児童生徒の困り感の裏にある児童生徒の気持ちに寄り添い、それぞれの特性に合った支援と特に複雑性 PTSD の意味と対応の仕方がよく分かり、スモールステップで、人の意思確認をしながら自立にむけて支援をしていきたいと思った。
- 列車の絵でトラウマの記憶が増えていくことや、過去の事が過去として受け止めることができないことを学び、困っている子の背景をアセスメントする必要があると思った。
- 児童の困り感に寄り添いながら、感情を認める声掛けを積極的具体的に行うことで、児童のよき理解者になることを心掛けたいと強く思った。
- 生徒の困り感が大人の困り感、この言葉に納得し、複雑性 PDS の原因となる「など」の中に私たちの対応が引き金になる可能性御あるのではないかと考え、そうならない為に感情承認を大切にして関わることの大切さを再認識しました。
- 児童生徒の困り感とその困り感の背景にあるものについて、児童の立場になって考えることの大切さ、背景にあるもの（生物、心理、社会）の視点で考えていくことを学んだ。



(5) 学校の役割

- 「病院ではできない。学校現場だから出来ること」という言葉にも心打たれた。学校ではできることは限られている、病院に行けばと思ってしまうが、私達ができることはたくさんあると実感した。
- 生徒も保護者も困っているから共に支援をしていくことが大切で、寄り添う必要があると思った。様々な理由で学校に来れないなどの子がいて、それぞれの対応が必要である
- 担任している児童が複雑性 PTSD と ASD を同時に持っているのだとお話を聞いて確証を得た。しかし、その事実を保護者が理解し、心療内科などを受信するに至るかに大きな壁があると思った。学校でできる対応をたくさん教えていただいたので、2学期から通級を行いつつ、学級でも支援していきたいと思った。
- 不登校傾向児に対して、感情への支援で特定の人がまず関わり、状況に応じて支援者を広めていくことが大切なことがよく分かった。紹介して頂いた事例について興味をもち、保護者、特に母親への寄り添いを大切にしていきたいと思いました。
- 複雑性 PDS の理解と感情支援の捉え方について、学級担任の立場でできることと通級指導担当者としてできることを考えることができました。

(1) 児童生徒の実態把握

- 生徒のことを考えること。家庭環境や発達段階、困り感などをきちんと把握することが支援する際に大切だときちんと把握することが支援する際に大切だと思った。
- その子どもの事情や背景に合った、支援や指導を大切にしていき、キーパーソンの先生が一人で抱え込まず、チームで育てる重要性を感じた。
- 児童のつまずきの原因や特性を細かく分析すること、本人の自己決定やペースを尊重すること、本人だけでなく、保護者も支えていくことを大切にしていきたいと思った。
- 児童の感情に寄り添ったり、児童の心の声を聴きながら対応するとともに、ゴールを決めて、その子の特性に合った支援を行うことが大切だと思った。
- 子どもにとって学校が安心できる場所になるように、本人の思いを丁寧に聞き、保護者との連携をとりながら対応していくことを大切にしていきたいと思った。
- 特性ばかりに目がいくが、細かなアセスメントに関わる人が共通理解しないといけない。親子揃って受け止めていくべきだと学んだ。
- その子その子の困り感にや抱えている不安向き合い、必要な手立てを探していきたい。
- 関わりの中で子供との約束を必ず守ること、スモールステップで目標を子供の姿に応じて設定していくこと、キーパーソンとなるためにも、子供との信頼関係を築いていくことが大切である。



(2) 児童・生徒の具体的支援について

- 生徒の自己決定を大切にすることや共に方向性を示すことが大切だと思った。
- 本人の言葉や苦しさを丁寧に聞き理解したり、安心感の醸成、キーパーソン、人間関係を作る、自己決定の場を大切に守ることや友達へのつなぎ、気持ちをほめる、不安への対応が大切だと思った。
- 子ども以上に母親が苦しんでいるので、母親の思いを受け止め、母親が元気になることで子どもも元気になるよう指導していく必要がある。
- 子ども自身が決めたこれをこの時間やるなどということはこちらが延長したりせずに守ることや支援が必要な児童について、焦らず感情承認し、この人が言うなら頑張ってみようと思ってくれるような存在になりたいと思いました。
- コツコツ積み重ねて子どもと関わっていくことが大切であり、不登校であってもそうでなくても、どの子も自己肯定感が上がるような指導や関わりを大切にしていきたいと思った。
- 子供自身の「できた」を増やし、自己決定をさせていくためにスモールステップを与えていくとともに、教師自身も決めた対応や時間を守り徹底していきたい。
- 自己決定をさせたときに、それを必ず守っていくこと。子供の心の安定を図っていくことを大切にするとともに児童生徒が自己決定して決めたことを教師が守ることを大切にしたい。
- 不登校生徒との関わり方にも様々な方法があり、滞在時間を決めて時間を守り守り切ることで守り切ることで自己決定の場を与えたり、徐々に関わっていける教員を増やしたりするなど、その子にとって将来どんな力をつけられると良いか、そのために今から実践していくことは何かという視点で考えていきたい。
- これからも発達障害や不登校の問題を抱える児童に今後たくさん出会うことと思ので、日々学びながら、周りの先生や保護者の方と連携することを心がけたい。
- 子どもの将来を、誠実に考えてかかわっていききたい。
- 多くを求めてしまいがちだが、マイナスの気持ちを受け止めながら、実現可能なスモールステップを設定しながら関わることを大切にしたい。
- どの子も学びたい、勉強を解流様になりたいという思いがあることがわかったので、日頃の授業はもちろん、個別の支援も大切にしていきたいと思った。



(3) ケース検討会について

- 先に予定を伝える、ケース検討会での時間配を考える、ゴールのあるケース会議を開いて効果的に対応することなど効果的なケース会議の持ち方を考えていきたい。
- 不登校の生徒が年々増えているように感じる。一人一人の生徒の特性に合った方法で関わっていくことが生徒の自立への近道で、ケース会議の方法はすぐにでも実践できると思うので、取り入れていきたい。
- ケース会は、必要だと思っていてもうまく話がまとまらなかったり、結局対応が決まらなかったりしたことがあります。中小学校の片倉先生のケース会の視点をもとに有意義な会議を進められるようにケース会議のみならず、会議のコーディネートをしていきたい。
- 現在、不登校の生徒に何人か関わっているので、学校対応の仕方やケース会議の持ち方がとても参考になった。時間が伸びてしまったり対応策が明確にならなかったりすることがあるので有効的なケース会議にしていきたい。
- 効果的なケース会議は、働き方改革の中のケース会議の実践として納得いくものがあり、今後ぜひ本校でも実践していきたい。
- 会議は時間を決め、ゴールを決めることは、多くの会社では当たり前のことだが、教育現場ではダラダラとした会議になることが多いので、目指すゴールに向けて準備を進めていくようにしたい。
- 家庭との連携が大事だと思った。不登校とほほえみの実践は、同じことをしているが、違いは、家庭の協力があるかという1点だと思う。放課後に学校に通ったり、ほほえみに通うなどは家庭の送迎が不可欠だが、それが無いゆえに通えない児童、生徒がいる。そういうときに保護者へのサポートを公的機関が支援するなどの体制づくりができるとうい。
- 限られた時間を最大限に活かせるように情報共有しながらゴールを決めるケース会議の持ち方、段階を踏んだ粘り強い支援が実践で必要だと感じた。
- 効果的なケース検討会のためには会議のゴールを決めること、流れと時間配分を決めること、開始時刻、終了時刻を守ること、誰に何を話してもらうかや参加者と記録者を決めておくこと、ゴールの共有とアイデアの発散、アイデアの収束を参加者が理解していることなど会議のコーディネートが必要だと感じた。

(4) 学校としての対応について

- 不登校児童への対応として、学校全体でチームを組んで取り組むこと、保護者と思いを共有して同じ方向で取り組むこと、段階を踏んで取り組むこと、本人の自己決定が大切だと分かった。
- 担任ができることをケース会議などを活用して、明確にして支援をしていくことが大切。
- 個への支援をどのようにするか、保護者・関係機関・学校が共通した思いを持っていくことがとても大切だと感じた。
- その子の今をうけとめながら、一步一步社会的自立に向かって支援できる大人集団でありたいと感じた。子どもや保護者、関係の先生方との連携を大切に1人を大切にしていきたい。
- 今すぐではなく、先を見据えてできることを学校・保護者と共有すること、職員全員が方法、ゴールを共通理解し、支援、指導を行うこと、本人の自己決定を大切にしながら、少しずつ関わる先生を増やしていく連携が大切だと感じた。
- ケース会議は自校で開くことが多いのでゴールや合意形成が分かりやすくなるようにしたい。
- 子どもが決めたことを尊重し無理強いしないことを大切にしていきたい。
- 日々、さまざまな支援や試行錯誤がされていることがわかった。私にもできることを模索していきたい。子や親の困り感を共に歩んでいけるのは、学校なんだと改めて感じた。
- キーパーソンを一人決めて少しずつ安心感を増やしていくこと、学校が愛着形成の取りかかりとなることを心がけていきたいと思った。
- 支援を必要としている児童には、職員が共通理解をして臨むことが大切であり、保護者も苦しんでいるため、よく話を聞いて対応していかないといけないと思った。まずは、諸問題に対し一人で解決しようとするのではなく学校全体で共有することが大切。
- 不登校児の特性からくる困難さを保護者と共有して、指導にあたること。保護者と不登校児童への対応で、1人の先生から少しずつ関わっても大丈夫な大人を増やしていき、本人が自立に向けて前向きになれるよう、慌てず時間をかけて働きかけていくことが大切だと感じた。
- 指導や支援において、合意形成(いつ、誰が、誰が、何を、今後の方向、学校では、家庭では、いつまでに、どこまで)を図ること、小中連携態勢を作ることが大切だと思った。



※いただいた令和5年度の研修についての意見は今後検討し、次年度の研修計画に反映させていただきます。